

---

# 黒ノ聖杯戦争

minarai

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒ノ聖杯戦争

### 【Nコード】

N2317Y

### 【作者名】

minarai

### 【あらすじ】

聖杯戦争…

それは万能の願望器「聖杯」を求めて、七人の魔術師が英霊を使役し殺しあう儀式。

もし聖杯が英霊以外の何かを呼び出したのなら…

呼び出したもの、呼び出されたものの未来は大きく変わり出すのか  
もしれない

-----

基本的にf a t eを軸に話を進めていきます。  
初投稿なので誤字脱字多いですが、どうぞよろしくお願いします。

## アーチャーvsライダー

ガキン!!

甲高い金属音と同時に、アーチャーの右手の干将が弾き落とされる。

「ぬっ・・・!!」

「ちっ!!」

アーチャーとライダー、二人の口から苦悶の声が漏れる。

ライダー・・・坂田銀時は渾身の一撃で仕留めそこなったこと  
アーチャー・・・エミヤはアサシンの見切ったと踏んだ一撃を防ぎ  
きれなかったことに対してだ。

苦肉も二人の剣士は同じ思いを抱いた。

・・・目の前の男を侮っていたわけではないがどうやら推測よりずつ  
と難敵のようだ、と。

ライダーは真剣を構えアーチャーを睨んだまま動かない。

「フム、どうしたのかなライダー、攻めるなら今だろう?この通り  
万全とは言い難いが?」

不敵な笑顔を浮かべ、空いた右手をアピールするかのようにな平を広

げる。

ライダーもまた不敵に笑い

「いやいや、昨日のガキ」といい、目の前の奴といい「手品」  
が得意らしいからな。迂闊には……！」

「っ！」

自らの言葉も言い終わらない内に白髪の侍は一瞬で距離を詰め刀を  
振り下ろし、それを赤い騎士は咄嗟に投影した「右手の干将」と左  
手の莫耶を交差し止める。

ガキン！

またも夜の学園に金属音が響く。

アーチャーは「ふう」と一息を吐き

「迂闊には何かね？」

そう、尋ねた

ギ、ギ、ギ、ギ

互いの剣がこすれ合い耳障りな音が鳴る

ライダーが口を開く

「お前性格悪いだろ？」

「君ほどではない、それに…っ!!」

「くっ！」

先ほどのお礼とばかりに、唐突にライダーの刀を弾き胸を二つにするべく干将を振るう。

ライダーはそれを、常人をはるかに超える反応で屈んで避け、横なぎの一閃を払う。

・・・そう、ライダーの身のこなしは達人の領域だ、並の相手ならこれで終わったらだろう。

しかし残念かな、「聖杯戦争」において殺しあう相手が並であることなどないのだ。

それが例えどんな「聖杯戦争」だろうともだ。

ましてや、このアーチャーは今回の聖杯戦争で唯一の「本当」の英霊だ。

一筋縄ではいくわけがない

ギン！

「おいおい、マジかよ……」

今のライダーの放った一閃は今までのそれより、数段早く鋭いものであった。  
それを

「…迂闊には飛び込めないのは、私とて同じだ」

まるでその一太刀がそこに来ることを知っていたかのように左手の冥耶で受け切っていた。

この戦いは、これから始まる長い長い夜のほんの一幕にすぎない。

そうとも、夜はまだまだ続くのだ。



## アーチャー vs ライダー（後書き）

各原作から1〜6人くらいしか登場しません。

## プロローグ1 ある騎士の世界

ここは誰かのために戦い続けた、ある騎士の世界

---

---

第五次聖杯戦争。

その最後の戦いを見届けた赤い騎士は自らのマスターに「何の後悔もない」という顔で

「大丈夫だよ遠坂、俺もこれから頑張っていくから」

そう言ってようやく傷ついた体を休めたのだ。

消えていった彼の笑顔は「正義の味方」を目指していた、いつかの少年そのものだった。

---

---

---

・・・戦いを終えた赤い騎士は本来ならばこのまま座へと還るはずだった。

しかし

願いと

陰謀と

偶然と

必然が

複雑に絡み合い

彼は再び「正義の味方」として誰かを助ける機会を得ることになる。

## プロローグ2 とある小さな魔道士の世界

とある小さな魔道士の世界

---

「私はただの失敗作で偽物なのかもしれません。

アリシアになれなくて、期待にこたえられなくて。

いなくなれって言うなら、遠くに行きます。

だけど、生み出してもらってから今までずっと、今もきつと・・・！

母さんに笑ってほしい、幸せになってほしいという気持ちだけは本物です。

私のフェイト・テストロッサの本当の気持ちです。」

小さな魔道士は万感の思いを込めて、最愛の母に手を伸ばす。

「・・・」

彼女の使い魔アルフもそれを見守っている。

この間にも、「時の庭園」の崩壊は進む。時間はあまりない。

自らの娘の告白に対し、

プレシア・テストロッサは「フツ・・・」と鼻で笑い、言った

「帰らないわ・・・」

九つのジュエルシードをさらに稼働させる。

「私は行くわ、アリシアと一緒に・・・!」

「母さん・・・!!」

「言ったでしょ、私はあなたが嫌いだって・・・」

崩壊の速度は上がる

そしてプレシアは

永遠の眠りにについているフェイトの「オリジナル」であり「姉」である、アリシア・テストロッサと共に「虚数空間」へと落ちていった。

「母さん!アリシア!」

家族が消えていった虚数空間へ手を伸ばすフェイト。

「フェイト・・・!」

それを止めようと、アルフが駆けよる

---

……ここから、歴史が変わりだす。

否、微かに変わり始めた歴史が大きな変化を出し始めたのだ。

---

---

---

「!!!」

「フェイト!!!」

「え・・・?」

主の危機に気付き全力で走りだすアルフ

大きな瓦礫がフェイトへと落ちてきたのだ

半ば呆然としているフェイトではそれを避けられない

「フェイトちゃん!!」

この場に居合わせたもう一人の小さな魔道士、高町なのはも声を上げる

「ぐう!!」

フェイトへと飛び込み、瓦礫をよける

ところが飛び込んだ先には既に足場などなかった。

そしてフェイトとアルフは虚数空間へと落ちていった。

## 第一話

## Fate / stay night

side フェイト

私は寝てるような起きてるような不思議な感覚の中にいた。

そして思い出す、

ジュエルシードを探しに次元を超えて海鳴市に来たこと

そこで出会った白い女の子のこと

そして私の母さんのこと……

……そうだ、私も……母さんとアリシアの消えていった虚数空間へ落ちてしまったんだ。

私を庇ってくれた使い魔のアルフを巻き込んで

あれから私はどうなってしまったのだだろうか？

もしかして死んで……



「……イト……！……エイト！」

そこまで考えて私を呼ぶ声が聞こえた。

そして気付いた……私はまだ起きてないことに。

じゃあ起きないと……

「……ん」

「フエイト……！」

目を覚ますと目の前には私の自慢の使い魔がいた。

アルフは泣きながら私に抱きついて私の名前を呼び続ける。

「大丈夫、大丈夫だよ」

あやすようにアルフの頭をなでる。

「大丈夫じゃないよ！ずっと目を覚まさないから死んじゃったのか  
と思ったじゃないか！」

「ううん、大丈夫。・・・ごめんねアルフ。」

心配させちゃって・・・。心の中でそう付け足す。

「フェイトが無事ならそれでいいよ。」

そう笑って（まだ涙声だったけど）今までうつ伏せだった私を手を  
差し出して起きあがらせてくれた。

立ち上がって周りを見渡して気付いた。

「ここ・・・海鳴市？」

私がジュエルシードを探しに来た、海に隣接した街だ。

「うん、そうみたい。」

ここは海鳴市の公園で、周りに人はいない。

あたりは暗いしもう夜みたいだ。

「私たち虚数空間に落ちて・・・その後どうなったか覚えてる？」

アルフはううんと首を振って

「私も起きたらこの街にいたんだ。すぐにフェイトを探しに飛び回ってたらここにフェイトがいて・・・。」

それより前のことは覚えてないと、アルフは続けた。

「どづいつことだろう？虚数空間の下は海鳴市があったってこと？  
けど、そんなことがあるわけ・・・。」

最後のほうはほとんどひとり言のように自然と口から出た。

「そんなこと気にしても仕方がないよフェイト。」

わからないことはとりあえずアジトに帰ってから考えようよ?」「アジトというのは私たちがこの街にいたときに借りていたマンションのことだ。

たしかに私もそしてきつとアルフも酷く疲れているだろうし、一度マンションに帰ってゆっくりと考えたほうがいいだろう。

そう・・・きつと私は疲れているはずだ・・・

だというのも、起きてからずっと何か大事なことを忘れているような、気付いてないような・・・そんな妙な感覚が続いているからだ。

「そうだね、一度マンションに戻ろうアルフ。」

うん、と頷くアルフと一緒に私は歩きだした・・・いや、歩き出そうとした

「フエイト・・・!」

「うん・・・!」

アルフの警戒を促す呼びかけに返事をする。

そう、歩き出そうとしたその瞬間、空気が一変した。

何かとてつもなく大きな存在がいる・・・！！こっちを見ている・・・！！

感じとつた理由は理屈じゃない本能だ。

アルフも同じことを思ったのだろう。今は人間体だが、それでも牙を鳴らしている。

私もバルデツシュを使いバリアジャケットに身を包む。

・・・？

なぜだろうか、バルディツシュを使った瞬間何か違和感のようなものを感じた。

しかしどんどん強くなる「その存在」の威圧感に余計な考えは吹き飛んだ

バルデツシュを構え身構える

そして・・・現れた「その存在」に、私の戦意はもろくも崩れ去った

「ほお・・・ただの小娘かと思ったが、見込みは外れたようだ」

さもおかしそくに嗤いながらこっちに歩いてくる。

背中まで届く長髪を白く染め、右目に眼帯。

左目からは人を、ものを、世界を、あらゆるものを恨んで・・・憎んでいることが、はつきりとわかるほどの感情が漏れ出ている。

水源のように湧き上がる恐怖をこらえて私は聞いた

「あなたは・・・誰ですか・・・!？」

黒いコートに身を包んだこの人は答えた

「九鬼……耀鋼だ。」

九鬼耀鋼くきようこう……それが彼の名前らしい。

「あんたいつたい何しにここに来たんだい……!？」

今にも跳びかかりそうな表情でアルフが尋ねる。

そしてこの人……九鬼耀鋼はやはりおかしそうに言った。

「こんな夜更けに俺のような存在が「こんな所」まで来るんだ、理由なら検討がつかだらう？」

つかないようなら……見込み外れもいいところだ。」

右手に持った「傘」を私たちのほうへ向ける

この瞬間、疑惑が確信に変わった。

そう、この人は

「……私たちの…敵…!!」

距離をとるため後ろに大きくジャンプする…!

「そつだとも」

「…え？」

私が

着地するその瞬間

生身で腹部に鉄球をぶつけられたような衝撃が走った。

「あぐっ!!」

後ろにあった、木に叩きつけられ肺から空気が出る…意識がかすむ  
何をされたのかわからない…  
うつすらと目を開けると九鬼耀鋼は右足を突き出していた。

まったく見えなかったその攻撃は、私が絶望を感じるのには十分だった。

「せいぜい足掻いて生き延びてみせろ、さもなければ俺がただの小娘を殺したことになるからなあ…!!」



九鬼耀鋼くきゆうこうが嗤わらう

「フエイト!? こんのおおおおおお!」

アルフがあの人に向かって飛びかかる

「・・・アルフ! だめ!」

なんとか声を絞り出す。けど、それはもう遅くて

「・・・」

九鬼耀鋼は飛びかかるアルフのパンチをわずかに体を屈めて避けると、そのまま手刀を首に打ち込む

「がっ! うう・・・!」

そのまま九鬼はアルフの首をつかんで持ち上げた。

「アルフ!」

起き上がるうとするが体に力が入らない

既にアルフには意識がない。

きっとあの人があつても力を込めれば、たやすくアルフの首は折れるだろう。

アルフの首を掴んだまま九鬼耀鋼は目だけを私に向けて聞く

「これで終わりか？」

瞬間、私は悟った

私がこのまま何もできなければ、あの人はためらいなくアルフのこ  
とを殺す。本当に、何のためらいもなく。

「や、やめて・・・」

私は力なく訴える。体は動かない。イヤだ、イヤだ！

九鬼は嘆息し

(イヤだ！イヤだ！イヤだ！イヤだ！イヤだ！イヤだ！イヤだ！)

「助けて・・・」

「そうか」

そう言って

手に

力を

「  
“ 投影、トレース開始 ”  
」

そんな言葉が聞こえた  
後ろからはまばゆい光が差し  
そして

「つつなに!？」

無数の剣が、九鬼耀鋼に襲いかかった。

アルフを離して避けることに必死な九鬼耀鋼を呆然と見ていると

後ろから足音が聞こえた

振り返ると

赤い騎士がそこにいた。

赤色の騎士は私のほうに視線を向けて

「君が　　私のマスターか？」

そう・・・問いかけた

エピソード    アーチャー    1

Inside    エミヤ

凜との別れを告げた後、私という存在は座へと帰り記録となるはずだった。

しかしその途中で

(…イヤだイヤだイヤだ！)

狂おしいほどの少女の叫びが聞こえる。

そして、私の目の前に「光」が現れ、私の中に「知識」が流れる。

…なるほど、どうやらこの中に入ればこの声の主の元へ

新たに始まる聖杯戦争の、アーチャーのクラスとして召喚されるらしい。

しかしどうする？

私にはもう果たすべき目的がない。

それならばこの召喚に応え、戦うことに意味はあるのか？

私の理性がそう尋ねてくる。

「フツ、何を今更…」

元よりオレは

誇りの為でも

復讐の為でも

地位でも 金でも 名誉でもなく

「誰かを救う」…そのために剣を執るのだ。

(助けて)  
(了解した)

そうして私は

光の中へと飛び込んだ

## 第二話 聖杯戦争1

side フェイト

「君が 　　　　　 私のマスターか？」

いきなり現れて、そして多分私のことを助けてくれた赤い色の人は私に目を向けそう尋ねてきた。

「え？え？あの・・・」

けれど私はこの状況に全然頭がついていけてなくて返事を出来ないでいると

赤い人はニヤツと笑い



「冗談だ、君が私のマスターであることはもう分かっている。つまりこんな質問をする意味などないわけなんだがね、驚く君を見ていたら言ってみたくなったのだ。」

「え？」

え、えと、どうゆうこと？

私が尚も戸惑っている赤い人は「ふむ」と、何か納得したようなつぶやきを漏らすと

「いろいろと不安だろうが、まあ安心したまえ。

私は、「正義の味方だ」

そう言うと私の頭に手を置いて、ポンポンと軽く叩いた。

なんでだろう？

ただそれだけのことだったのに

この人が味方ならもう大丈夫・・・そんな気がして

不安がどこかへと消え去ってしまった。

「分からないことは後で説明しよう。  
今は・・・」

視線を私から、こちらをじっと見ていた九鬼に向けると

「先にマスターの不安材料を取り除くことにしよう。」

そう言って九鬼のほうへ歩いて行った。

（不安に駆られていたマスターを安心させるためとはいえ、まさか再び「正義の味方」などと口にすることがあるとはな……）

アーチャーは皮肉気に笑う。

しかし、なぜだか嫌な気分にはならなかった。

……衛宮士郎に負けてから自分は変わったのだろうか？

そんな思考を最後に、意識を眼前の敵へと移す。

敵は愉快気な顔をしてアーチャーを待っている。

奇襲から少しの時間が経ち、どうやら余裕を取り戻したらしい。

アーチャーは言葉でだけ気遣う

「待たせたかな？」

敵は「いいや」と首を振り、そして言葉を続ける

「まずは、自己紹介をしよう。

せっかくこれから殺し合う相手をただ「敵」とだけ認識するのは  
味気がない。」

そう言って自らの名前を告げる。

そう・・・敵。

二人の少女はは実力が離れすぎてて「殺し合う」ができなかった。

一方的に蹂躪する相手を敵と認識するのはありえない。  
だが、目の前の男は違う。

この赤い騎士はただそこに立っただけで確固たる強さがうかがえる。

おそらく九鬼が今まで闘ってきた相手の中で1、2を争うだろう。

苦戦は必至で、下手をすれば死ぬ。

故に九鬼耀鋼にとって目の前の男は敵なのである。

「私は別にどちらでも構わないのだがね。

そうだな、この場合は「アーチャー」と名乗っておこう。」

「ああ分かった。

ではアーチャー、始めようか？」

九鬼は構えをとる。

アーチャーに向けて半身の状態になり、

右手の傘・・・「カンフェール」の先端、石突をアーチャーに向ける。

アーチャーが承の意味での笑みを浮かべ、

彼の双剣「干将・莫耶」が、何処からかその手に現れると

アーチャーと九鬼耀鋼は激突した

### 第三話 アーチャーVS鬼

「ッシ！」

九鬼がカンフェールで突きを放つのを合図とし、二人の闘いは始まった。

「ハツ・・・！」

九鬼耀鋼の放った苛烈な突きを  
アーチャーは右手に持つ干将で難なく防ぐ。

そして反撃をしようと踏み込み、莫耶を振り上げる・・・！

「甘いわー！」

叫ぶと同時、

九鬼は突きを放ち切り伸びきった腕を

.....

.....

先ほどの一撃を上回る速度で引き戻し、さらにそれを上回る速度で突きを放った・・・！！

「っ！」

すかさず振り上げた莫耶でそれを防ぎ、後退を余儀なくされるアーチャー

それを

「逃がさん！」

九鬼耀鋼は追撃する。

やはり追撃も同じくカンフェールによる突きだ。

しかし驚いたことに今の一撃より尚速く、一撃ごとにその突きは苛烈さを上げていく



「む……！」

さらなる後退を強いられるアーチャー

そこにさらに突きが迫る……！

「……ハア！」

迫る突きを双剣で打ち返す。

「ぐっ」

お互いの一撃による衝撃で後退する。  
アーチャーと九鬼。

傘を構えた状態で、鬪いが始まってから初めて九鬼が言葉をかける

「どうしたアーチャー、この程度か？」

「.....」

アーチャーは無言だ。

九鬼は顔に笑みを浮かべる。

自分が絶対の優位に立っていると思う者の特有の笑みだ。

九鬼は後ろで鬪いを見守っている少女に目を向けると

「ほとんど今夜は見込みがはずれるな。こんな腕である小娘を守る  
気だったのか？」

ああ、いいとも好きなだけ下がれ。先にあの小娘を殺してやる」

九鬼の言うとおり、このままアーチャーが後退し続けなければいずれはフェイトのいる場所まで到達するだろう。

アーチャーはため息を一つ吐くと

「心配には及ばんよ、安心したまえ九鬼耀鋼。  
君との闘いにおいて私はもう下がらん。」

そう言っつて双剣を構える。

「聞き違えたのかね？」

俺は今「もう下がらない」と聞こえたのだが？

まさかこれだけのやり取りでも俺の突きを見切った気であるのか？

ハハハハ！これは傑作だ！思い上がりもここまでいくと見事としか言いようがないな。

ああ！その見栄だけは認めよう。」

心底可笑しそうに笑う九鬼。

それを前にアーチャーはもう一度ため息をつく

「君の耳は正常だ。私は確かに下がらぬと言ったぞ。  
そら、好きなだけ攻めるといい。  
早くしないと先にお前を殺してやるぞ?」

「きさまぁ・・・戯言を!!」

九鬼の怒哮を合図とし再び戦闘がされた。

あたしは林檎を食べながら木の上でその闘いを観察していた。

「へえ、あの赤い奴なかなかやるじゃん」

本当になかなかやる。あの九鬼を相手にあそこまでやるなんて正直驚いた。

ひよつとすると勝手にしまつかもしれない。

まあそうなれば次は自分が相手をするだけだが、真正面から戦うのは危険だ。

「ここは一つあの背中にデカイのを一発くれてやるか・・・」

そう思い立ち上がると...

「ハイハイハイ、勝手なことしないでよランサー。」

君なんかあの闘いに割りこんだら一瞬で殺されちゃうよ？

駄目だよ、思い上がりはほどほどにしないとすぐに死んじゃうよ？

ま、ボクは例外だけだね！」

と頭の中にマスターの音が響いた。

「うちー！」

めんどくせえ、なんであんな奴があたしのマスターなんだよ！

「苦虫を噛み潰したみたいな顔してるところ悪いけどお、お仕事です！」

君のいる場所のすぐ近くにある小さな喫茶店でまた一人と一匹呼び出されました！

すぐに行ってちゃちゃと殺っちゃてねー、それじゃあー！」

それからマスターの声は聞こえなくなった。

「胸糞悪いけど仕方ねえ、

あたしの「願い」のためにも悪いけどその新人君には死んでもらうとするか」

そしてあたしは近くにある喫茶店とやらに向かった

九鬼は突きを

放つ！放つ！放つ！放つ！  
放つ！放つ！放つ！放つ！  
放つ！放つ！放つ！放つ！  
放つ！放つ！放つ！放つ！

いずれも速く、いずれも苛烈、いずれも急所へ。  
その様はさながら針の雨。無数の「点」「最早」「面」と化して  
アーチャーに百穴を穿ちにくる・・・！



アーチャーと九鬼耀鋼の闘いが始まって三分が経過しようとしていた。

しかし、状況は闘いが始まってから何一つ変わっていない。

「ッハ！」

九鬼が突く。

「ふっ！」

アーチャーがいなす。

九鬼はひたすらに攻めに徹し、アーチャーはひたすらに守る。

これまでその関係は崩れたことはなく、  
はたから見れば九鬼が優位に立っているように見えるだろう。  
しかし実際は違う。

「キサマ!」

九鬼は悪態をつく。  
理由はいたって簡単で

「悪いが、有言実行がモットーでね」

宣言通りアーチャーが一步も下がることなく、九鬼の突きを凌ぎ切  
っているからである。

それもそうだろう。

九鬼は知る由もないが以前の聖杯戦争でアーチャーは、  
彼よりはるかに苛烈な突きを放つ槍使いと競い合ったからである。

故にアーチャーはその経験を生かし、攻略法を練ることで九鬼攻撃  
をかわしきっているのである。

「さて、そろそろ反撃をさせてもらおうにしよう」

迫りくる突き全て弾くと、九鬼の懐まで入っ……………

「バカめ」

そう九鬼がつぶやくと

アーチャーの体は大きく後ろへ吹き飛び

彼の持つ干将は碎け散った

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2317y/>

---

黒ノ聖杯戦争

2011年11月8日06時03分発行